◎実習報告・幼稚園◎

令和３年度　幼稚園教育実習報告

幼稚園教育実習担当　渡邉輝美・石川千穂子・安部えつ子・助安明美・島田知和

令和３年度の幼稚園教育実習は、大分県内はもとより、県外の公立幼稚園・私立幼稚園・幼保連携型認定こども園で取り組んできた。１年次の観察実習は１週間、２年次の教育実習は３週間の期間で実施している。さらに２年間にわたる教育実習指導の中で、日誌の記入の仕方や保育指導案の作成等の指導と合わせて、子ども理解や援助の仕方といった保育・教育の基礎、実習の目的や意義についても講義し、より具体的な指導・援助に結びつくような指導を行った。

１．実習先　観察実習・・・大分県内88件　県外２件　学生157名
　　教育実習・・・大分県内97件　県外１件　学生170名

２．実習期間　観察実習：令和３年９月２日～９月８日
　　教育実習：令和３年10月４日～23日

３．教育実習の意義・目的

大学で学んでいることを具体的な体験を通して理解するとともに、身に付けた専門的知識や技術を実践する中で学習を深め、知識・技術を総合化し、応用力を身に付け、現場で得た課題を持ち帰って学習することにより、保育者としての意識や保育観・教育観を養う。

４．教育実習の様子

・子どもたちと直接触れあい、生活を共にすることによって、その気持ち・欲求や発達の姿を理解する。
・子どもたちの生活を安定、充実させ、能力が伸びるための指導・援助の仕方について学ぶ。
・幼稚園等の機能・運営方針・環境・設備・人員配置等についての認識を深める。

５．教育実習を担当して

学生にとって、幼稚園教育実習による４週間は、大変貴重な学びの場となっている。実際に子どもたちと一緒に幼稚園等で生活することによって、子どもたちの園での生活の様子や、保育者の援助などを直接体験することが、学生を大きく成長させている。さらに実習中における保育指導案の作成、日誌の記入など学生にとって、難しい課題においても保育者からの丁寧な指導や、大学による講義と結びつけることで、より確かな深い学びを得ることができている。

私が目指す保育者の姿

T2002055　池田　優花

私は、幼稚園教育実習で目に見える保育者の姿と、実際の保育現場を経験しないとわからなかった保育者の姿を学ぶことが出来ました。

特に印象に残っていることは、保育者と子どもの関係についてです。毎日多くの子どもと関わり、保育をする中で子ども一人一人をよく理解し、子どもたちの性格を理解しておくことが大切だと感じました。3歳児クラスに入った際、給食の時間にいつもはおかわりをしない子が珍しくおかわりをしました。私はおかわりをしに来た子どものお皿におかずを入れていました。すると、保育者が「○○くん、おかわりしたの！？すごい！」と声を掛けるとその子はニコと笑ってとても嬉しそうでした。そのような、日常生活の中で子どもの小さな変化やできるようになったことに気付くことが出来るのは近くで見ている保育者だと感じました。また、子ども同士のトラブルが起きた際に保育者は子どもの気持ちを聞くだけではなく、その子の性格に合わせた援助、声掛けをしていました。最初、私が仲裁に入っていましたが、何もすることができず近くにいる保育者に代わってもらいました。その後、保育者にどのような声掛けをしたらよかったのか聞いてみると、私は気付くことの出来なかったその子の性格、子ども同士の仲について教えてくれました。子ども同士のトラブルでも、子ども全員に同じ声掛けをするのではなく、状況を理解し、子どもの性格を知ったうえで子どもに合った声掛けをすることが大切だと学びました。

また、実習期間中に公開保育が1週間ありました。コロナ禍でもあり、各家庭での人数制限はありましたが、多くの保護者の方が子どもを見に来ていました。保育者は、特別なことを見てもらうのではなく、普段の活動の様子や園で頑張っていることを見てもらうようにしていました。そのため、誰の子の保護者が来るのかきちんと把握し、保育者同士で1日ずつ主活動を何にするのか話し合っていました。また、来ていた保護者に直接何ができるようになったのか、最近園で何をして遊んでいるのかなど伝え、保護者との交流も大切にしていました。

幼稚園教育実習を3週間行い、子ども理解、子ども・保護者との信頼関係を築くことが大切だと学びました。これは、すぐに築けるものではないと思います。そのため、私は実習で学んだ保育者の姿も真似しつつ、保育者として毎日を一生懸命頑張り、子どもと毎日笑顔で過ごせるようにしたいと思いました。

「寄り添う」学びと実践

T2002101　木村　希美

私が2回の幼稚園教育実習を通して学んだことは、「寄り添う」ということです。

1年次の幼稚園教育実習では、保育者の姿から「子どもたち一人ひとりに合った援助」と、子どもたちの姿から「子どもの興味関心の惹かれるもの」について学ぶことができました。子どもたちの発達段階に応じた言葉かけや、活動を行っており、一人ひとりに合った援助や、子どもの興味関心の惹かれる活動が展開できるのは、常日頃から子どもたちに寄り添っているからなのだと感じました。

2年次の幼稚園教育実習では、保育者の姿から「受け入れる姿勢」、子どもたちの姿から「創造力」と「自分の言葉で表現し、伝える力」を学ぶことができました。15日間の実習で印象的だったのは、子どもたちがやってみたいと思ったことに対し、互いに意見を出し合い、考える

姿でした。子どもたちがのびのびと活動することができる背景には、保育者の子どものやりたいという、気持ちに寄り添う姿勢がとても大切なのだと感じました。子どもたちのやりたいという思いを受け入れ、それをするためにはどうすればよいのかを一緒に考え、寄り添う保育者の姿が信頼関係を築き、子どもたちの学びと成長につながっていると感じました。

私は、２回の幼稚園教育実習を通して、「寄り添う」ということの大切さを学ぶことができました。しかし、保育者と子ども間における「寄り添う」は、ただ近くにいて話を聞くだけでは成り立たないと思います。

２年次の実習中、男の子２人の間で太鼓の取り合いが起き、近くに居た私は、二人の話を聞いて思いを受け止め、二人が納得できるように援助しようとしました。しかし、二人の思いを聞いて話をしても平行線のままでした。その後、保育者が間に入ってくれ、解決することができましたが、寄り添いたいという気持ちはあっても、話を聞くだけでは寄り添えていないと感じました。

学校の多くの授業で、寄り添うことの大切さを学んできましたが、座学で学び、大切だと感じるだけでは、現場で活かすことができないと実習を通して感じました。

２回の実習を終え、４月から保育者として現場に出て、子どもたちと関わっていく中で、私は、子どもたちの思いを大切にして関わっていきたいと思いました。「寄り添う」ということの重要性、難しさを感じ、保育者として適切な関わり方が私にはできるのだろうかと不安になりましたが、子どもたちの思いを大切に関わることで、少しずつ信頼関係が育まれ、私の思う「寄り添う」ということができるのではないかと思いました。

「保育者と子どもたちから学んだこと」

T2002158　築城　　彩

私が、幼稚園教育実習で学んだことは、大きく二つあります。

一つ目は、「子どもたちと一緒に作り上げていく保育」と「メリハリのついた保育」の大切さです。保育者のやりたいことや考えだけではなく、子どもたちの意見や考え、興味関心を大切に毎日の活動を考えている保育者の姿がとても印象的でした。そこへ、子どもたちのやりたいことに加えて、保育者自身のねらいや願いも活動に込め、縄跳び数えの活動を取り入れたり、英語教室の時間を取り入れたりしながらメリハリのついた保育をなされているのがとても印象的でした。このような保育から子どもたちも友達同士で声かけをしながら「もうすぐ片付けの時間だよ」「今は～をする時間だよ」などと友達同士で助け合う姿や自分の事だけではなく、周りに目が配れる子どもたちの姿が見られました。

二つ目は、一人ひとりに応じた関わりと見守ることの大切さを学びました。私は、実習中新聞紙ジャンケンを設定保育でさせていただきました。ゲーム中ジャンケンに負けて悔しさのあまり泣き出した女の子がいました。私はすぐに「大丈夫だよ。悔しかったね。頑張ったね。」と言葉をかけに行き、その後も泣いている女の子にずっと言葉かけをしていました。すると、担任の先生から「少し可哀想って思うかもしれないけれど言葉かけをしすぎると涙が止まらなくなる子どももいるからその時は少し見守ってみたらいいかも」とアドバイスをもらい見守ってみることにしました。その時に改めて一人ひとりに応じた関わりと見守ることの大切さ学ぶことができました。

その後、落ち着いた女の子が私のそばに来て

「悔しかったけどたのしかった。またやりたい」と気持ちを伝えてくれて、その子なりに自分の気持ちに整理をつけて自分の気持ちを伝えにきてくれたのだなと思い、見守ることの大切さを子どもたちからも学ぶことができました。また、悔し涙を流すくらい一生懸命に取り組んでくれた子どもたちに感謝の気持ちと嬉しい気持ちでいっぱいの設定保育となりました。

これらの幼稚園実習の経験を通して４月から保育者として働き出すのだという実感と共に「先生も子どもを選べないけれど子どもたちも先生を選べない」という言葉を忘れず責任と自覚をしっかり持ち学ぶことを忘れず経験することを恐れない保育者になりたいと思います。

質の高い保育を目指して

T2002196　藤澤茉里奈

私が幼稚園教育実習で学んだことは保育者としての意識です。実習などの実際の保育現場での経験を通して、保育者として子どもへの関わり方や責任の持ち方、考え方などを学ぶことが出来ました。私がめざす保育者は、子どもや保護者から信頼される保育者ですが、その保育者像を達成するためには子どもの理解が重要になってくると考えています。実習などで日々の生活を子どもと一緒に過ごす中で、遊びなどを通して一人ひとり子どもの性格や好きなもの、得意なものなどが様々で、一斉活動などでも違いが多くあると感じました。子どもにとって保育者が選べないという環境で、子どもの発達を把握し、子どもそれぞれに応じた関わりがすごく大切になってくると思います。子どものありのままを受け止め、応答的に関わることが、子どもや保護者との信頼関係に繋がると思います。

また、幼稚園教育実習では環境構成の重要性を学びました。幼児教育の中で、環境はとても大切で、環境一つで子どもの思考力や主体性に違いが出てくると感じました。そのため、遊びや生活環境などの物的な環境に加え、保育者の関わりなどの人的な環境も意識する必要があると思います。私が特に意識したいことは言葉掛けです。子どもと過ごす中で、言葉選びや言葉掛けのタイミング、言葉掛けの際の姿勢などを常に考え、子どもの発達を促すことができる言葉掛けを行っていきたいと考えています。さらに言葉掛けに加えて、視覚的情報を取り入れていくことが子どもの発達に大きな良い影響を与えると思います。そのため、保育者として子どもと関わっていく中で言葉掛け、子どもが興味を持てるような視覚的情報の最も良い取り入れ方を探求していきたいと思います。

これから、保育者として実際に子どもや保護者と関わっていきますが、責任感を持ち、常に子どもの最善の利益を考え、まっすぐに向き合っていき、子どもや保護者がこの保育者でよかった、子どものことをしっかりと理解して関わってくれる先生でよかったと感じてもらえるような保育者でありたいと思います。さらに園と地域の関わりはすごく重要になってくると思うので、園に通う子ども家庭だけでなく、視野を広げて、地域家庭のことも支援できるような保育者でありたいと思います。